

日蓮事跡初見年表

小林 正 博

はじめに

我々は今日、日蓮六十年の生涯をかなり詳細にわたって語る事ができる。それは、膨大な日蓮伝に関する著作、研究論文が刊行・発表されてきたからである。しかし、我々の知る日蓮の生涯には、多くの作られた伝承と過度の潤色が介在したままになっていることも忘れてはならない。このような虚飾化された日蓮像に対して、真実と伝承と潤色とを立て分ける研究作業は、日蓮門下に連なる研究者に課せられた使命であると考えている。もちろんその努力は近代に入って精力的に続けられており、特に室町・江戸期に著された日蓮伝によって形成された虚像は、近代歴史学の鋭い批判的となっていく。1890年東京帝國大学史料編纂所の重野安繹が、竜口法難における「光もの」伝説を否定し、これと田中智学との間で大論争になったことが、近現代の歴史学的手法をもとにした「日蓮像」の再構築を促すことになる。その先鞭をつけたのは山川智応で、綿密な文献研究を土台にして、「日蓮聖人伝十講」(1921年)を世に問い、さらにその内容を改訂して「日蓮聖人」を著している(1943年)。山川の意欲的な日蓮の生涯解明に取り組む姿勢は、1949年までも続き、その著作「おしろいを洗い流した日蓮聖人伝」(『信人』に連載)という表現に象徴されているのである。山川の研究を参考にしながら東大教授・姉崎正治は名著「法華経の行者日蓮」を書きあげたが、室町・江戸期に著された日蓮伝の内容について、依用するところ多く、歴史学的な観点からはやや物足りなさが感じられる。同じく、山川の研究を引用しながらも、伝承の全面的否定を掲げたのは宗教学者・佐木

秋夫で、その著「日蓮」(1938年)は、一定の学術的な水準をたもちながら、真蹟現存の日蓮著作以外は信用の対象としない、日蓮自身の語る回想表現をもそのままでは受け取れないという内容で、日蓮門下に日蓮伝の再検討を強く迫ったのである。最近では、日蓮門下の研究者の中にも、客観的に真実の日蓮像に迫る著作が現れてきている。立正大学教授・高木豊の「日蓮 その思想と行動」(1970年)は歴史学の立場から伝承の扱いに慎重な姿勢を貫いており、好書の一つであろう。

このような「日蓮伝の歴史」を築いてきた先学たちの研究努力を知るとき、わたしなりに、もう一度御書や日蓮伝等の記述を整理して、真実像形成への基礎的研究を試みたいという欲求が高揚してきたのである。その着手の作業として、「スリムな日蓮」の解明を本稿によって提示できればと考えている。

この「日蓮事跡初見年表」は個々の事跡が、いつごろどの文献によって語られているのかを整理したものである。扱った文献資料を時代別に区分し、日蓮在世中の十三世紀を1次資料として、これを[1]とした。以下十四世紀を[2]とし、近現代に至る[7]まで区分してある。特に「御書」での事跡を語る表現については、真蹟が現存する場合は[1]とし、現存しない場合は、それを引用する「日蓮伝」の成立時期や、その御書の写本、その御書名のある目録類の成立年代に時代区分を合わせている。これは拙稿「御書の文献学的基礎資料」(東洋哲学研究所紀要第12号所収)における各御書の初見年代一覧に基づいている。また[7]の十九世紀以降現代までの「日蓮伝」関係書は枚挙に暇なき量であるが、近現代の「日蓮伝」形成に重要な役割を果たした代表的な著作だけを参考にした。なお、著作・消息類の述作年代まで年表に入れると煩雑になるので重書と事蹟に関わるもの以外は省略した。本年表は入手、管見でさう文献は網羅したつもりだが、未刊文書もまだ多数あり、今後も改訂増補がなされることは十分に覚悟しているところである。関係各位の御教示を願ってやまない。

文献資料一覧並びに略号

一次資料 (十三世紀) . . . [1]

御書 御書で御真筆現存 (記号◎) 曾存 (記号○)

直弟子写本存の箇所 (記号◇)

伝承類

「遷」宗祖御遷化記録 1282年10月16日付 日興 歴代法主全書1-80

二次資料 (十四世紀) . . . [2]

御書 主に十四世紀の直弟子・孫弟子写本が存在するもの

富木目録 (「富」常修院本尊聖教事・1299年・昭和定本日蓮聖人遺文2729)

と日祐目録 (「祐」本尊聖教録・1344年・同2732) に記述がある御書

伝承関係著作

「日」日蓮聖人御弘通次第1325年 身延3世日進 日蓮宗宗学全書1-339

「波」波木井殿御書1330年ごろ 偽作 昭和定本日蓮聖人遺文1925

「法」法華本門宗要抄1330年ごろ 偽作 昭和定本日蓮聖人遺文2150

「三」三師御伝土代1333年ごろ 大石寺4世日道 富士宗学要集5-1

三次資料 (十五世紀) . . . [3]

御書 初見年代が十五世紀の目録類にあるもの、また写本のあるもの

「朝本」日朝録内目録・日朝写本

「平」平賀本録内目録・平賀本写本

御書の注釈書

「朝」御書見聞1481年 身延11世日朝 日蓮宗宗学全書15.16.17巻

伝承類

「聖」聖人御系図御書1461年 偽作 昭和定本日蓮聖人遺文2045

(日朝写本もあり 1461年成立の「当家宗旨名目」に引用)

「当」当家宗旨名目1461年 日実 日蓮聖人伝記集519

(中山系の日親の弟子 ただし1467年の記述もある)

「長」長禄寛正記1465年以降 群書類従375巻

「元」元祖化導記1478年 身延11世日朝 日蓮聖人伝記集9

「産」産湯相承事1488年初出 日教本 富士宗学要集2-315

四次資料 (十六世紀) . . . [4]

御書 初見年代が十六世紀の目録類にあるもの、また写本のあるもの

「満」本満寺録外 「宝」三宝寺録外 「受」他受用御書

御書の注釈書

「健」御書抄1506年前後 日健 日蓮宗全書所収

伝承類

「註」日蓮聖人註画讃1510年ごろ 妙法寺日澄 本圀寺本 (角川書店)

「薩」元祖蓮公薩佗略伝1566年 本隆寺日修 日蓮聖人伝記集185

「祖」祖師伝1559年 要法寺13世日辰 富士宗学要集5-17

「略」宗祖一期略記—1586年 妙本寺日我 富士学林研究教学書2-169

五次資料 (十七世紀) . . . [5]

御書 初見年代が十七世紀の目録類にあるもの、また写本のあるもの

御書の注釈書

「性」御書注1609年 要法寺15世日性 日蓮宗全書所収

「相」御書和御書式1679年 久成院日相 日蓮宗全書所収

「講」録内啓蒙1695年 安国論日講 日蓮宗全書所収

伝承類

「抄」註画讃抄1649年 日収か 日蓮聖人伝記集82

「精」日蓮聖人年譜—1683年 大石寺17世日精 富士宗学要集5-67

「暦」元祖一代暦—1690年 安国院日講 日蓮聖人伝記集195

「霊」法華霊場記冠部1682年 豊臣義俊 日蓮聖人伝記集211

六次資料 (十八世紀) . . . [6]

御書の注釈書

「好」録内扶老1728年 玉沢日好 日蓮宗全書所収

「証」祖書証義論1770年以前 日通 東大史料編纂所蔵全十巻

(その抜粋が日順の「御書略註」1848年とされる・日蓮宗全書所収)

「導」祖書綱要1785年 日導 日蓮宗史料2~6巻

〔「祖書綱要刪略」1801年日寿が祖書綱要23巻を7巻に刪略したもの

日蓮宗全書所収)

伝承類

「高」本化別頭高祖伝1720年 身延32世日省 日蓮聖人伝記集247

「頭」本化別頭仏祖統紀1731年 身延36世日潮 日蓮宗全書所収

「年」本化高祖年譜並びに攷異1779年 健立・玄得 日蓮聖人伝記集309

七次資料(十九世紀以降)・・・[7]

伝承類

「真」日蓮大士真実伝1867年 小川泰堂 明文館(縮刷)

「十」日蓮聖人伝十講1921年 山川智応 浄妙全集刊行会

「姉」法華経の行者日蓮1932年 姉崎正治 隆文館

「佐」日蓮1938年 佐木秋夫 白揚社

「山」日蓮聖人1943年 山川智応 法蔵館

「豊」日蓮 その思想と行動1970年 高木 豊 評論社

なお、御書名のあとに数字が連記されているのは、前者が「日蓮大聖人御書」の、後者が「昭和定本日蓮聖人遺文」の頁数を示す。また略号で「富要」は富士宗学要集を、「歴全」は歴代法主全書を、「宗全」は日蓮宗宗学全書を指す。

日蓮事跡初見年表

承久四(1222) 辛巳 1歳

[7] 春(旧暦)誕生(山24)

貞応元(1222) 壬午 改4. 13 1歳

【生誕日】

[1] 御誕生(◎「授決円多羅義集唐決」の奥書「阿房国東北御庄清澄寺道善房東面執筆 是聖房生年十七才」から逆算)

[2] 2.16(三1)

[2] 2.16午の尅(法・定遺2158)

[3] 或記2.16辰の尅(元13)

[3] 或いは8.1とも云う(当519)

[3] 小湊に誕生寺とて小堂之有り。日家と申す中老の開闢との伝有り(元13)

[3] 日蓮聖人御由来伝りに云く、十月十三日に御誕生。これは乳母が常に朝日に向かって經典読誦していたため十月十三日にその胸に日輪が入って現生した、と(当528)

[4] 如来二月十五日示滅。元祖二月十六日誕生(註34)

[5] 2(或3)16午(或辰)(靈220)

[5] 誕応の日に及んで近所の海涯に青蓮花生ず。今其の所を蓮花淵と号す。此の徳を以て蓮長と号す(抄86)

[6] 誕生井蓮華潭今尚存す(高253)

【母】

[3] 日蓮聖人御由来伝に云く(前後関係から判断)乳母の姓は清原氏云云(当528)

[3] 有る人云く 母の夢想 日輪蓮華之上座来り給ふ。日蓮の日はここに由来。日祐云く 日は日本。蓮は月氏震旦。日蓮で三国相応すると(当520)

[3] 悲母は梅菊女。平の畠山殿の一類。法号は妙蓮(産・日教本315)

[3] 母の夢想 清澄に通夜。東条片海に三国の大夫。是を夫と定めよ。七歳の春三月二四日の夜のこと。遊女の如くなりし時、御身の父に嫁げり(産・日教本315)

[3] 母の夢想 叡山の頂きに腰をかけて近江の湖水を以て手を洗ひて富士の山より日輪の出で給ふを懐き奉ると思ひて打ち驚いて後、月水留ると夢物語申し侍れば、父の太夫、我も不思議なる御夢を蒙るなり(夢)見て後、御事懐妊の由を聞くと語り相たりき、さてこそ御事は聖人なれ(産・日教本315)

- [3] 法名 父妙日2.14 母妙蓮8.15 (元13)
- [4] 母は清氏 (註34)
- [4] 母妙蓮8.14逝去 (略170)
- [5] 国字伝²⁾に梅菊と作る (年323 国字伝の成立年代により [5] に比定)
- [6] 母は清原氏 舍人親王の遠裔 畠山の一族 梅千代という 上総の大野吉清の娘 (頭62)
- [6] 大野吉清
 - 政清 — 曾谷教信
 - || ————— 梅千代 — 宗祖
 道野辺右京の娘 (証1-12)

【幼名】

- [3] 十二から十八までは薬王丸 道善房の命名 出家後は初めは御名を是性の御房と申也、又御名乗をば蓮長と申し奉る也 (当519)
- [3] 始めは蓮長 (産・日教本315)
- [3] 童名は善日、仮名は是生、実名は即日蓮なり (産・日教本316)
- [3] 或記 童体をば薬王丸と 御出家の初め仮名は是生、実名は蓮長後日蓮也 委くは別紙に有り (元14)
- [3] 或いは経王麻呂 (朝 宗全15-31)
- [6] 善日麻呂 (高254)

【出自】

- [1] 東条の郷片海の海人が子 (◇「本尊問答抄」370・1580日興写本)
- [2] 海辺の旃陀羅が子なり (「佐渡御勘気抄」891・511祐)
- [2] 東条片海の郷、海人の子なり (三1)
- [2] 東条小湊浦釣人権頭之子 (法・定遺2158)
- [3] 民が子 (「中興入道消息」1332・1714平)
- [3] 貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり (「佐渡御書」958・614 朝)
- [4] 片海の石中の賤民が子 (「善無畏三蔵抄」883・465満)

【系譜】

- [3] 聖武天皇の時の河内守通行から十一代の遠江の貫名重実 子三人 仲太仲三仲四 所領の相論がもとで合戦 東条の片海に流される 次男仲三の子が日蓮 (聖・定遺2045)
- [3] 河内守通行は三国氏 (当527)
- [3] 日親云く 左大臣藤原冬嗣の子良門の二男利世から始まる。利世の子共良より四代の共資より下京し遠州へ。共資より五代の赤佐太郎盛直の二男赤佐俊直が貫名政直と号す。その孫に重直その子重忠は伊勢平氏に与力して、東条片海市川村に配流。日蓮はその配所で生まれた。(長342)
- [3] 或記 先祖は遠州の人、貫名五郎重実 平家の乱に安房へ流されたり貫名重実の次男重忠 子に五人 藤太・幼死・仲三郎・元祖 聖人・藤平 (元13)
- [4] 父は遠州の刺史 聖武天皇の末裔 (註34)
- [4] 父遠州より東条郷片海市河村小湊浦にはなたれる (註34)
- [4] 父祖平氏の逆を避けて東海の房州に謫して東条郷小湊に寓す (薩187)
- [5] 藤原鎌足……共家 (井伊の祖) ……政直 (貫名の祖) ……重真 (或は実) 一重忠一日蓮聖人 (靈217)
- [5] 或記 河内守通行は異敵を対治し三国姓と賜わる 神亀八年 (731年 神亀に八年なし) に遠江を賜う (抄82)
- [5] 元祖の三国氏に生まれ玉ふことは所弘仏法天竺震旦日本の三国流布を表わすと云う義なり (抄83)
- [6] 父貫名重忠 建仁三年に伊勢平氏に与力して叛き小湊の浦へ (高254)
- [6] 父重忠 配流は建仁三年五月七日 三一歳の時なり 流罪の理由は「系図御書」のまま (証1-10)
- [6] 利世の子・共良は三国氏 (頭61)

[6] 母は清原氏 四人の児を産す 重政・夭死・高祖・重友 (高254)

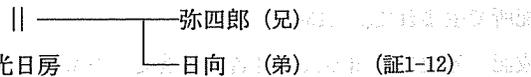
[6] 重忠に五子有り 藤太重政・夭死・仲三重仲・大士・藤平重友 (年322)

[6] 兄弟 藤太重政=浄円房 藤三重仲=浄顕房 藤平重友=日法 (証1-11)

[6] 旧説に曰く 浄顕は大士の兄 (年351)

[6] 道野辺右京の孫が大田乗明の室 (証1-15)

[6] 重忠 (兄) 実信 (弟)



貞応二 (1223)	癸未	2 歳
元仁元 (1224)	甲申 改11. 20	3 歳
嘉祿元 (1225)	乙酉 改4. 20	4 歳
嘉祿二 (1226)	丙戌	5 歳
安貞元 (1227)	丁亥 改12. 10	6 歳
安貞二 (1228)	戊子	7 歳
寛喜元 (1229)	己丑 改3. 5	8 歳
寛喜二 (1230)	庚寅	9 歳
寛喜三 (1231)	辛卯	10 歳
貞永元 (1232)	壬辰 改4. 2	11 歳
天福元 (1233)	癸巳 改4. 15	12 歳

【清澄入山】

[1] 同じき郷の内・清澄寺と申す山にまかり登り住しき (◇「本尊問答抄」370・1580日興写本)

[2] 5.12に清澄寺へ (法・定遺2158)

[2] 道善御房の坊に居て学問す (波・定遺1925)

[4] 薬王麻呂 (註34)

[7] 道善房は住職 (真14)

【誓願】

[1] 日本第一の智者との誓願 生身の虚空蔵菩薩より明星の如くなる大宝珠を右の袖にうけとる (○「清澄寺大衆中」893・1133)

[3] 或記 比類なき智者にと虚空蔵菩薩老僧如意宝珠左の袖に (元15)

[4] 幼少の時より日本第一の智者との誓願 虚空蔵菩薩眼前に高僧となって明星の如くなる智慧の宝珠を受け (「善無畏三蔵抄」888・473満)

[5] 十二のとしより日本第一の智者との誓願 (「破良観等御書」1292・1283日筵写本)

文暦元 (1234)	甲午 改11. 5	13 歳
嘉禎元 (1235)	乙未 改9. 19	14 歳
嘉禎二 (1236)	丙申	15 歳
嘉禎三 (1237)	丁酉	16 歳

[2] 十二・十六の年より二十余年、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等を回る (「妙法比丘尼御返事」1407・1553祐)

[5] 10.8 国字伝の説を取て十六歳の時出家 (年328 国字伝の成立年代により [5] に比定)

[6] 十六受戒 真言の業を道善房より (導361)

暦仁元 (1238) 戊戌 改11. 23 17 歳
[1] 11.14 「授決円多羅義集唐決」を清澄で書写する 是聖房と有り (金沢文庫蔵)

[1] 在清澄 (◎「授決円多羅義集唐決」の奥書)

[1] 法然・善導等がかきをきて候ほどの法門は日蓮らは十七八の時よりしりて候いき (◎「南条兵衛七郎殿御書」1498・326)

[3] 日蓮聖人御由来伝に云く 十七歳にて出家して是性阿闍梨日蓮と名乗る (当528)

- [6] 鎌倉へ (年331)
- 延応元 (1239) 己亥 改2. 7 18歳
- [2] 出家 (日339) (波・定遺1925)
- [2] 10.8出家 道善房に値ひ奉りて東寺家の真言を習学 (法・定遺2158 ただし年代不記)
- [2] 三箇年の間山門・園城寺・南都・東寺・高野等へ (法・定遺2158 ただし年代不記)
- [2] 叡山での師は三塔の総学頭・大和莊俊範法印 (日大直兼台当問答記 宗全2-427 1363年の記述)
- [3] 出家して始めは是成坊。又蓮性坊 (長342)
- [3] 十二年御学問 まず三年真言を習学 (当520)
- [4] 明星直見の本尊のことを横川の俊範法印に御物語りあり (御本尊七箇相承・富要1-32 妙本寺日我の弟子日山の写本による1600年ごろ)
- [5] 先ず浄土宗・禅宗をきく 其の後叡山・園城寺・高野・京中・田舎等へ (「破良観等御書」1292・1283日筵写本)
- [5] 虚空蔵に三七日祈る (曆197)
- [6] 清澄寺の山頂に虚空蔵菩薩を祀る 一百日求聞持を行ず (高255)
- [6] 二十余年の諸宗廻りの御資助の檀那は太田乗明と母方の曾谷教信と名越の尼御前 (証1-14)
- [7] 梅菊の父は富木氏の一族で鎌倉・叡山遊学の費用をだす (真128)
- 仁治元 (1240) 庚子 改7. 16 19歳
- [6] 虚空蔵菩薩を祀る 一百日求聞持を行ず (頭63)
- 仁治二 (1241) 辛丑 20歳
- [6] 虚空蔵菩薩を祀る 再び一百日求聞持を行ず (頭64)
- 仁治三 (1242) 壬寅 21歳
- [3] 戒体即身成仏義を著す (平)
- [5] 古老の伝 (1683年) に尊海と叡山へ行き園頓坊と常光院を兼帯と (好：扶老6 の内容から)

- [6] 鎌倉へ 然阿良忠に会う (高256)
- 寛元元 (1243) 癸卯 改2. 26 22歳
- [5] 鎌倉で浄土宗を学ぶ 能化頓死す (霊222)
- [6] 比叡山へ (頭66)
- [6] 園頓房の主に命ぜられる (高257・年代不記 頭67では寛元元年)
- 寛元二 (1244) 甲辰 23歳
- 寛元三 (1245) 乙巳 24歳
- [6] 横川定光院の主に (高260・年代不記 頭72では寛元三年)
- 寛元四 (1246) 丙午 25歳
- [5] 鎌倉から下総へ 富木殿同船 富木九歳 師二十五歳 (霊223)
- [6] 園城寺へ さらに道元・円爾・道隆に会う 円爾の東福寺の日蓮木の話 (高260 ただし年代不記 頭72では寛元四年)
- 宝治元 (1247) 丁未 改2. 28 26歳
- [6] 興福寺で法相宗, 法隆寺で三論宗, 招提寺・西大寺で律を学す (頭73-74)
- 宝治二 (1248) 戊申 27歳
- [5] 西国へ この時日蓮と改める (霊224)
- [6] 高野山・東寺・園城寺へ (頭75)
- 建長元 (1249) 己酉 改3. 18 28歳
- [6] 比叡山浄光院で三十番神を感得 (高263)
- 建長二 (1250) 庚戌 29歳
- [6] 叡山を去り天王寺へ さらに伊勢へ 皇大神の神告により大白法宣示顯説の時を覚知する 4月28日の黎明の時 さらに浄明寺で妙見の示現 鎌倉へ 比企大学三郎能本に会う (高265-266)
- 建長三 (1251) 辛亥 30歳
- [1] 11.24京都五条之坊門富小路で「五輪九字明秘密義釈」を書写する (同書奥書による)
- [5] 入京 五条あぶらの小路天王寺屋浄本が宿に止なり

東寺 五条防(ママ)門太平寺(靈225)

[5] 12.14存海をともなって叡山圓頓坊にのち常光院へ 兼帯(靈225)

[6] 沼津へ 小湊へ 鎌倉へ(頭79-81)

建長四(1252) 壬子 31歳

[5] 8三井寺へ(靈225)

[6] 鎌倉から下総東漸寺へ 註法華經を撰す(頭82)

建長五(1253) 癸丑 32歳

[6] 3 伊勢を通過して清澄へ(年34)

【開宗】

[1] 4.28 (◎「諫曉八幡抄」585・1844)
(○「清澄寺大衆中」894・1134平)

[1] 4.28妙法蓮華經の七字五字(◎「諫曉八幡抄」585・1844)

[1] 4.28午(◎「聖人御難事」1189・1673)

[1] 3.28に始此法門仰出たり(「安国論問答」日興・歴全1-10)

[2] 3.22一七日室内に入る(法・定遺2159)

[2] 3.28早朝朝日に向って合掌し十返ばかり初めて題目を唱える(法・定遺2159)

[2] 東条景信に五箇条の法門(法・定遺2159)

[2] 3.28念仏無間業御法門始めて仰せ出さる(日339)

[2] 3.28念仏は無間の業(波・定遺1926)

[2] 3.28念仏無間地獄・南無妙法蓮華經と唱ひ始め給ひ畢んぬ(三1)

[3] 4.28(「中興入道消息」1332・1714平)

[3] 夏のころより題目を唱えた(「松野殿後家尼御前御返事」1393・1631朝)

[3] 或る義 閏三月なる故に或三月とも四月とも書き玉ふと(元17)

[4] 夏の比とは不審也三月二十八日に始て唱出玉ふ故也(健:下1519)

[4] 夏の始より題目を唱えた(「松野殿御消息」1379・1140満)

[4] 東条左金吾景信等に念仏無間禪天魔(註35)

[4] 日蓮と自ら御名乗り(健:上121)

[4] 4.28午 一山の衆を集め(祖17)

[4] 4.28朝 經題を唱える(日修「御書註」3立正安国論發題)

[4] 三或四月二十二日(註35)

[5] 春の比より念仏と禪をせめる(「破良觀等御書」1293・1284日筵写本)

[5] 四箇名言(曆199)

[6] 4.28 三月は誤なり(高267)

[6] 今より父母の号を取って日蓮と呼ばん(高270)

[6] 三月二八日は折伏の始め四月二八日は唱題の發軔を指す(証1-29)

【開宗後】

[2] その日清澄を擯出せられる(三1)

[3] 或記 國中に風聞の間、地頭強盛の念仏者なるが故、忽ちに清澄寺を擯出 西条華房の郷の青蓮房へ 西条の地頭も念仏者 鎌倉へ 名越の小庵へ(元17)

[4] この夜清澄寺を出て西条花房郷へ(註35)

[4] 鎌倉名越松葉谷へ(註35)

[4] 4月松葉が谷 8月に一庵を結ぶ 今の妙法寺(靈226)

[6] 北条朝時の妻・名越の尼の援助により名越に居す(証1-20)

[6] 大尼=朝時の妻 中尼=時章の妻=名越の尼 新尼=公時の妻 高祖が名越に居したのは大尼の援助による(導6-300)

[6] 鶴岡八幡宮の大藏經を閲す(高270)

[6] 5 南無谷から船で米浜(三浦郡深田村)に着きそれから鎌倉へ(年351)

[6] 高祖 船橋の浦よりの官船に富木氏に乗せてもらう 鎌倉の参勤に向かう富木播磨守常忍帰依する(導6-332)

- [6] 冬 日昭弟子に (高271)
- [6] 11 日昭弟子に (年351)
- [1] 12.9富木氏に手紙を書く
(◎「富木殿御返事」定遺15。ただし建長五年は稲田説)
- 建長六 (1254) 甲寅 33歳
- [6] 閏正月 日昭弟子に (頭88)
- [6] 下総へ 飾鹿の浦で帰路の船に 富木胤継にであう (高271)
- [6] 10日朗弟子に (頭90)
- [7] 11月下総へ 鎌倉に向かう富木氏を追いかけて会う (真129)
- [7] 辻町の東小町の往還の路に立ちて四箇格言 (真132)
- 建長七 (1255) 乙卯 34歳
- [6] 註法華経を著す 旧説に従う (年356)
- 康元元 (1256) 丙辰 改10. 5 35歳
- 正嘉元 (1257) 丁巳 改3. 14 36歳
- [1] 8.23戊亥の剋 大地震 (◎「安国論御勤由来」33・421)
(◎「立正安国論奥書」33・442)
- [3] 一切経蔵に入る (「中興入道消息」1334・1716平・但し年代無記)
- [5] 駿州岩本実相寺の経蔵に入る (精76) (霊227)
- [5] 日興弟子に (精76) (霊227)
- 正嘉二 (1258) 戊午 37歳
- [5] 巖誉律師をたのみ岩本実相寺に 日興帰伏 (霊227)
- [6] 1岩本実相寺に (年359)
- [7] 1.6鎌倉を立て岩本実相寺に (真141)
- [5] 2.14父重忠卒 妙蓮寺に葬る (霊227)
- [6] 父の死より安房へ 百日の喪を修する (高271)
- 正元元 (1259) 己未 改3. 26 38歳
- [6] 駿州岩本実相寺の経蔵に入る (高271)
- 文応元 (1260) 庚申 改4. 13 39歳

- [2] 岩本経蔵に入る (法・定遺2160 但し年代無記)
- 【安国論】
- [1] 7.16立正安国論を著す (◎「立正安国論奥書」33・442)
- [1] 宿屋禅門に付して北条時頼へ提出 (◎「立正安国論奥書」33・443)
- [1] 時頼に見参して天魔の所為の由を申す
(「故最明寺入道見参御書」定遺456)
- [2] 立正安国論上奏の時四箇格言を記す (波・定遺1926)
- [6] 立正安国論を松谷石窟で 後人寺を造る 妙法山安国寺 (高272)
- [6] 7.24時頼に会って四箇格言を (高272)
- 【松葉ヶ谷の法難】
- [2] 念仏者等に夜中小庵を襲われる
(◇「下山御消息」355・1330日法写本)
- [2] 念仏者等、打ち殺さんとしたがかなはず
(「妙法比丘尼御返事」1413・1561祐)
- [3] 或記 鎌倉名越の小庵を襲われ能登公、進士太郎疵を蒙る
(元20)
- [4] 其の後数日を経て諸宗数百人草庵に寄せ来たる。能登公、進士太郎 疵つけられる者多し (註36)
- [5] 数万人が夜中に押し寄せる (「破良観等御書」1294・1286日筵写本)
- [5] 或記 7.20 (精77)
- [5] 開目抄の大事の難四度の最初 (精77)
- [5] 8.27子の刻 松葉が谷の草庵を襲われる (霊227)
- [6] 数日を経て猿によって助かる 猿島山法性寺 (高272)
- 【法難後】
- [5] 下総の富木邸へ 百座の説法 一尊四菩薩を安置 (霊227)
- [5] 12武州へ (霊228)
- [6] 富木邸で高祖自ら一尊四菩薩を彫って安置 (高272)
- 弘長元 (1261) 辛酉 改2. 20 40歳

- [3] 弘長の比。吉田兼益より神道を伝授される。(長342)
- [4] 吉田二位兼益の話 三十神 (薩189)
- [5] 2.9 武州岡田の御厨の代官の口入で吉田兼益より神道を伝授される(靈228)
- [5] 3 鎌倉へ(靈228)
- [6] 伊勢へ行って吉田兼益より神道を伝授される。(高273)
- 【伊豆流罪】**
- [1] 5.12伊豆の国へ流罪(◎「聖人御難事」1189・1673)
- [1] 5.12戌時(◎「論談敵対御書」定遺274)
- [1] 御勘気をかうふりて伊豆の国伊東に流罪(○「報恩抄」322・1237)
- [1] 5.13(◎「一谷入道御書」1326・989)
- [1] 伊東八郎左衛門尉に預けらる(遷80)
- [1] 立正安国論を最明寺入道に奉る故流罪(遷80)
- [2] 5.12伊豆国伊東荘へ配流(波・定遺1927)
- [2] 長時によって流罪(「妙法比丘尼御返事」1413・1561祐)
- [2] 念仏者が毒の菌(きのこ)を持ち来る(三2)
- [3] 或書 伊豆国伊東の庄は七郷なり。留津(とまりのつ)の浦に著く。三十日ばかりを経て八郎左衛門尉の宿所の近辺に移る(元20)
- [3] 伊東八郎左衛門尉の病氣。二所三島熊野等の山伏共を催し祈らせたが叶わず大聖人に頼む。その時海中よりの金色釈迦仏一体を聖人に奉る(当535)
- [4] 伊東八郎左衛門尉朝高の館近くの小庵に(註36)
- [4] (建治二年七月の「辨殿御消息」には「伊東の八郎左衛門今は信濃の守……念仏者・真言師となった」とある・1225・1190満)
- [4] 日朗一人随従しようとしたが果たせず(註36)
- [4] 河名の津に著く。三十余日にわたって宿主船守弥三郎夫妻に外護される(註36)
- [4] 海中いろくづの中より出現の仏体を日蓮にたまわる事・此れ病悩

- のゆへなり(「船守弥三郎許御書」1446・230受)
- [4] ふなもりの弥三郎夫妻の外護(「船守弥三郎許御書」1445・229受)
- [4] 6 海底よりの金銅鑄仏の立像釈迦。朝高之を安置していた(註37)
- [4] 但馬公日乗、淡路公日地、師弟三人で朝高の病を祈る(註37)
- [5] 6.17朝高病悩によって祈禱を依頼(靈228)
- [5] 富津浦と云う処へ始て御着あり(抄98)
- [5] 少々目が浦に着く(靈228)
- [6] 船守弥三郎。後人寺を造る。蓮慶寺(高273)
- [6] 小目浦に著く。後人寺を造る。蓮著寺(高273)
- [7] 蓮著寺は万治二年(1659年)の開創(真171)
- 弘長二(1262) 壬戌 41歳
- [5] 時頼・宗時(ママ時宗) 夢中に凶怪を見て赦免の沙汰(靈229)
- [5] 11.11教家。久家判形して赦免状を日朗に渡す(靈229)
- 弘長三(1263) 癸亥 42歳
- 【赦免】**
- [1] 2.22御赦免(○「報恩抄」322・1237)
- [1] 2 (◎「一谷入道御書」1326・989)
- [3] 3.23御赦免(当535)
- [2] 伊豆の浦より白髪の老人来りて今年赦免と(三2)
- [3] 化人来って七日後に赦免(註37)
- [5] 或記に云う伝に云う。教家。久家判形して赦免状を日朗に(異本には日乗とあり)渡さる(講 上686)
- [5] 5.12赦免状の使者。但馬公日乗。伊東朝高の族也(暦201)
- [5] 或記に云う伝に云う。時頼・時宗。夢中に凶怪を見て赦免(講 上686)
- [6] 旧記に曰く。安房へ(年382)
- 【赦免後】**

- [2] 赦免後鎌倉へ (法・定遺2160)
- [5] 時頼に対面 時頼帰伏の色あって七月中旬松葉ヶ谷の草庵を与えられ釈迦仏を安置 (霊229)
- [6] 5.12鎌倉へ還る (高274)

文永元 (1264) 甲子 改2. 28 43歳

- [1] 7.5彗星東方に出現 (◎「立正安国論御勸由来」35・423)
- [1] 7.5大明星 (◎「立正安国論奥書」33・443)
- [6] 7.29安房へ (証1-50)
- [5] 8安房へ (霊230) (「諫迷論」日蓮 日蓮教学全書1-137)
- [3] 9.22東条花房の郷蓮華寺に在 (「当世念仏者無間地獄事」104・311平 (当・引用))
- [2] 10.3今一度舊里へもどろうと安房国へ (波・定遺1927)
- [3] 或記 慈父の墓を拝むため (元22)
- [1] 悲母の寿命を四年延ばす (◎「可延定業書」985・862)
- [1] 御乳母のひととせ御所勞・活きかへらせ 浄水の話 (「伯耆公御房御書」定遺1909)
- [3] 或記 八旬に及ぶ老母に浄水を結んで読経念誦 其の後四年間存命 (元22)
- [4] 母 七旬有余 (註37)

【小松原の法難】

- [1] 11.11申酉東条松原の大路で弟子一人殺、二人は大事の手を負う (「南条兵衛七郎殿御書」1498・326興)
- [1] 頭にさず左手打ちをらる (◎「聖人御難事」1189・1673)
- [2] 11.11申の時、笠を切り破られ頭に疵、癒えて後も疵の口四寸あり、右の御額なり (三1ただし文応元年になっている)
- [2] 本は房州の者にて候いしが地頭東条左衛門尉景信と申せし者、極楽寺殿・藤次左衛門入道・一切の念仏者にかたはられて度々の問註ありて・結句は合戦 (「妙法比丘尼御返事」1413・1562祐)

- [3] 11.11申の時東条小松原 (当535)
- [3] 或記 西条華房の青蓮房の所より東条左衛門の宿所を過ぎ前の大道で合戦左近丞打殺され 鏡忍房重体 左藤次疵を蒙る (元23)
- [4] 鏡忍房 乗観房 長英房 大疵を蒙る 檀那工藤左近丞害を蒙る 景信が師の左頭を切る (註37)
- [4] 天津の宿所へ 疵を治療して鎌倉へもどる (註37)
- [5] 鏡忍房と工藤左近之丞が討死、その地に鏡忍寺 (霊230)
- [6] 西条天津の城主 工藤吉隆かけつける (高275)
- [6] 眉間に三寸の疵を受く (高275)
- [6] 忠吾忠内出迎え 蓮華寺側の井戸で疵を洗う (頭108)

【法難後】

- [2] その後鎌倉へ (波・定遺1927)
- [4] 11.14西条華房の僧坊で道善房に会う (「善無畏三蔵抄」889・474満)
- [4] 道善御房種々の問答あり即ち念仏を止め釈迦を造り持仏堂に安置すと云云 (略181)
- [4] 景信 時を経ずして死 (註37)
- [4] 11仲旬帰倉 (註37)

文永二 (1265) 乙丑 44歳

- [6] 日向弟子に (頭109)
- [6] 11.14華房の青蓮房で道善房に会う (頭109)
- [6] 興津の佐久間兵庫の法華堂へ (頭109)
- [6] 常陸の築波山から 下野の那須野の温泉へ さらに宇都宮へ (年385)

文永三 (1266) 丙寅 45歳

- [3] 1.6清澄寺にあり (「法華経題目抄」949・405平)

文永四 (1267) 丁卯 46歳

- [5] 8.15母逝去 (霊230)
- [6] 鎌倉から富木邸へ 越年、日頂弟子に (頭110)

[5] 9.10奉行所に召されて御評定あり(霊232)

[2] 9.12に御申状あり(三)

【竜の口の法難】

[1] 良観訴状により佐土流罪 武州前司に預けらる(遷80)

[2] 鎌倉殿を牛飼と申候と讒奏申すに依て(波・定遺1928)

[3] 9.12未の刻 御宿所を責め出ださる(当536)

[1] 9.12申の時 二度目の高名(◎「撰時抄」287・1053)

[1] 第五の巻で打たれる(◎「撰時抄」289・1055)

[2] 四条金吾兄弟・熊王のこと

(◎「種種御振舞御書」913・966三・波 引用)

[2] 平左衛門尉が一の郎従・小輔房に打たれる

(◎「種種御振舞御書」912・963三 引用)

[2] 伊和瀬の小輔房に打たれる(法・定遺2160)

[3] 小輔房に打たれる(「上野殿御返事」1555・1633朝)

[3] 伊和瀬入道・大輔房・磯の五郎の三人が衣の袖をかつぱと引く(当536)

[4] 小輔と伊和瀬大輔は別人として記されている(註41)

[1] 9.12頰の座に望む(◎「聖人御難事」1189・1673)

[1] 9.12酉の時、御勘気(◎「土木殿御返事」951・503)

[1] 子丑の時に頰はねられぬ(◎「開目抄」223・590)

[1] 頭をはねられるべきにて・ありしが、いかなる事にやよりけん彼の夜は延びて(◇「四条金吾殿御返事」1120・664日興写本)

[2] 丑の時頰の座に(「妙法比丘尼御返事」1413・1562祐)

[2] ひかりたる物(◎「種種御振舞御書」914・967三 引用)

[2] 江之島の光物出来して御馬の頰を超えて行く(日340)

[2] 光物頰の座の上に出現(法・定遺2161)

[2] 太刀取・越智三郎左衛門太刀折れる(法・定遺2161)

[2] 月のごときもの使の頭へかかり

文永五(1268) 戊辰 47歳

[1] 閏1.18蒙古牒状(◎「立正安国論奥書」33・443 他多数有り)

[3] 3 甲州富士の実相寺に入り一切経を一見(当535)

[2] 10訴状を法光寺殿に見参に入る 祈禱の要請(波・定遺1927)

[3] 10十一通の状を書いて方々へ送る

(◎「種種御振舞御書」909・959朝)

[4] 10.11十一通状 十一箇所を列記(「十一通御書」初見は「註画讃」

1510年時宗への御状と弟子檀那中への御状を引用(註38~39))

文永六(1269) 己巳 48歳

[1] 蒙古重ねて牒状(◎「立正安国論奥書」33・443)

[1] 方々に諫暁したが返事なし(◎「金吾殿御返事」999・458)

[6] 富士吉田へ 富士山へ 山梨の勝沼へ 黒川へ 田波村へ 北原

村へ 萩原山へ 相州板橋へ(頭117)

文永七(1270) 庚午 49歳

[1] 11月の比方々に諫暁少々返事あり(◎「金吾殿御返事」999・458)

文永八(1271) 辛未 50歳

[1] 6.18良観の祈雨始まる(◇「頼基陳状」1157・1353日興写本)

[1] 7. 8行敏初度の難状(◎「行敏初度の難状」179・496)

[3] 7.22忍性から治部入道、信濃判官への状(元30)

[6] 8. 3大理卿に召し出され尋問される(頭121)

[4] 8.20平左衛門尉が所へ御出である也 安国論を与へ玉ふ

(健：下1213)

[6] 8.20平頼綱に面会を求め会見(頭123)

[4] 8.22一昨日御書 異本に云く九月十二日(健：下1217)

[5] 8.22平頼綱をもって安国論を進奏す(精92)

[5] 8.22(相 537)

[6] 8.22(講：下589)

[3] 9.10平頼綱に見参(「一昨日御書」183・501朝)

〔「妙法比丘尼御返事」1413・1562祐〕

[3] 三光天子の中に月天子は光物とあらはれ竜口の頸をたすけ、明星天子は四五日巳前に下りて日蓮に見参し給ふ

〔「四条金吾殿御消息」1114・505朝〕

[4] 越智三郎左衛門直重(註41)

[5] 或記 龍口の光物=月天子 依智の星下=明星天子 佐渡国の白鳥=日天子と相伝すと(抄166)

[6] 神光有り 東南より来る(頭125)

[1] 武蔵前司に預けらる(遷80)

[2] 9.12夜、武蔵守の預かり(○「報恩抄」322・1238)(○「種種御振舞御書」912・965三 引用)

【依智へ】

[2] 依智に入る(日340)

[2] 依智三郎左衛門の使者と法光寺殿の使者行き合う(法・定遺2162)

[2] 9.13午の時ばかりに依智へ本間六郎左衛門がいへに入りぬ(○「種種御振舞御書」914・968三 引用)

[4] 9.13午 愛甲郡依智郷 本間六郎左衛門尉重連の館へ(註42)

[2] 9.13夜明星のごとき星 梅枝に懸かる(○「種種御振舞御書」915・970三 引用)

[2] 9.13夜大星下 梅枝に懸かる(日340)

[2] 梅の枝に大彗星(法・定遺2162)

[3] 明星天子(「四条金吾殿御消息」1114・505朝)

[5] 今此所を星梅山妙伝寺といへり(霊233)

[3] 9.14平左衛門尉頼綱 次郎兵衛尉に三年で赦免する旨の書状を送る(元47)

【佐渡へ】

[1] 10.7佐渡へ(○「五人土籠御書」1212・506)

[1] 10.10依智を立つ(○「寺泊御書」951・512)

[2] 10.10依智を立つ(○「種種御振舞御書」916・970波 引用)

[2] 10.11佐渡流罪決定(法・定遺2162)

[3] 10.10佐渡へ(「土籠御書」1213・509日朝録外目録)

[1] 武蔵の久目河を通過して十二日を経て寺泊へ(○「寺泊御書」951・512)

[5] 10.22寺泊の津に至る(霊234)

[3] 10.23佐渡の島に付玉ふ 其の日大風 聖人自我偈を誦 赤色青色の二童子あられ無事佐渡へ(当536)

[6] 10.26流され覚田へ 波題目・岩題目の話(高278)

[6] 巖題目と波題目 角田の石田五郎と遠藤治郎(頭128~129)

[6] 10.11新倉 新曾城主黒田時光 13児玉 児玉時国 14下野栗津 長谷川長源 21寺泊 石河吉広(年410)

[2] 10.28佐渡の国へつく(○「種種御振舞御書」916・971波 引用)

[2] 10.28佐渡新穂郷塚原に下着す(法・定遺2162)

[2] 日興佐渡の嶋へ御共(三7)

[3] 嘉吉二年(1442年)に日朝が佐渡へ その時聞いた話では寺泊より船でマツサキと云う浦に御着ありけると(元39)

[4] 真崎の浦に著く(註43)

[4] 10.28佐州松崎に著く(薩234)

[6] 10.29小倉をすぎて新穂へ(年415)

[3] 11ごろ「開目抄」の執筆開始(○「種種御振舞御書」919・975朝)

[3] 11.1塚原へ(○「種種御振舞御書」916・971朝)

[3] 石田の一谷と云う処三昧堂に入る(当536)

[4] 塚原の三昧堂に移る(註43)

文永九(1272) 壬申

51歳

[3] 1.16・17念仏者数百人が来て法論(「佐渡御書」959・616朝)

[3] 印性房は念仏者の棟梁 日蓮の許に来て談義(「佐渡御書」959・616朝)

- [3] 1.16国国より法師等塚原の堂の大庭に集まり法論
(○「種種御振舞御書」918・974朝)
- [3] 或る記 日興・日向も佐渡に御参あり 印性房と談義 (元45)
- [4] 日興・日向 印性房と談義 (註44)
- [5] 1.16塚原に於て諸宗問答 (曆203)
- [1] 2「開目抄」を著す
- [2] 2.11三河愛知殿名越殿外討たれる (三4)
- [2] 2.15六波羅南殿討たれる (三4)
- [3] 或人 佐渡の国に申し伝へしは 初め塚原 坂東路十里計り隔て
一沢と申す山際に一間四面の堂これ有りけるに御住みあると
(元39)
- [3] 嘉吉二年 (1442年) に日朝が佐渡へ 一谷に一間ばかりの小堂と
御袈裟かけの松があった (元39)
- [1] 夏の比 石田の郷、一谷に (「一谷入道御書」1328・994朝 現存断簡
と写本部分ほぼ一致により [1] に比定)
- [5] 4. 3一谷の縁起には塚原より一谷へ移り玉ふ 四月三日近藤伊予
入道宛 勝利在判とあり (講：下376)
- [6] 4. 7石田郷一谷へ 四月三日は誤り (年420)
- [1] 10.24蒙古来襲の夢想 (◎「夢想御書」定遺660)
- 文永十 (1273) 癸酉 52歳
- [1] 4.25「観心本尊抄」を著す
- [4] 此年夏の比より石田郷一谷へ 松一本有り 袈裟掛けの松と号す
(註45)
- [5] 閏5.28日朗等赦免状 (精109)
- [3] 7. 8始めて御本尊を図す (元61)
- [6] 7. 8御本尊 化導記の板本現行の本に有るが、書本の化導記には
見えず (好：扶老678)
- [6] この本尊今一谷の妙照寺にあり (高282) (年430)

- [6] この本尊今身延山にあり (頭143)
- [1] 私の御教書 (◎「千日尼御前御返事」1313・545)
- [1] 12. 7武蔵の前司殿より佐土の国へ下す状
(◎「法華行者逢難事」966・798)
- [6] 佐州の太守朝直 重連への牒 (頭144)
- 文永十一 (1274) 甲戌 53歳
- [1] いまだゆりざりしかば・いよいよ強盛に天に申せしかば頭の白き
烏とび来たりぬ (○「光日房御書」928・1155)
- 【赦免】
- [3] 2. 8時宗夢想 赤装束の童子法光寺殿に申すに依って赦免へ (当
536)
- [3] 2. 8平頼綱も青衣童子の夢想 (当536 註45にもあり)
- [1] 2.14御赦免 (○「光日房御書」928・1155) (○「報恩抄」323・1238)
- [3] 赦免状 日朗が持参 (当536)
- [3] 赦免状 2.14 (御赦免状の事) と2.16 (武蔵前司殿書状の事) の二通
所収 (元52)
- [4] 日朗は八回佐渡へ行った 八回目の時赦免状を持参
(註45) (健：上473)
- [1] 3. 8赦免状佐渡着 (○「光日房御書」928・1155)
- 【鎌倉へ】
- [1] 3.13佐渡を立つ (◎「高橋入道殿御返事」1460・1088)
(○「光日房御書」928・1155)
- [1] 3.13まうら (網羅) に着 (○「光日房御書」928・1155)
- [1] 3.14網羅の津にとどまる (○「光日房御書」928・1155)
- [4] 3.13真浦とか云う津に下玉ふ (略194)
- [1] 3.15越後の寺泊に行く予定だったが流される
(○「光日房御書」928・1155)
- [4] 3.15柏崎 (略194)

- [6] 3.16柏崎 (高283)
- [1] 二日ちをすぎて柏崎につく (○「光日房御書」928・1155)
- [4] 3.16国府 (略194)
- [1] 次の日は国府につき十二日をへて鎌倉へ
(○「光日房御書」928・1155)
- [3] 信濃路を通る (○「種種御振舞御書」920・978朝)
- [1] 3.26鎌倉 (◎「高橋入道殿御返事」1460・1088) (○「光日房御書」928・1155) (○「報恩抄」323・1239)
- [3] 3.28鎌倉 (当536)
- [4] 名越の小庵へ 石井隆本のところ 本園寺と号す (註46)
- 【平頼綱と対面】
- [1] 4. 8平金吾に対面 (○「光日房御書」928・1155) (○「報恩抄」323・1239) (◎「高橋入道殿御返事」1460・1088) (◎「撰時抄」287・1053)
- [2] 富山云く 法光寺禪門西の御門の東郷入道屋形の跡に坊を作って 帰依せんとの給ふ (三8)
- [2] 法光寺殿より 東合谷を進候 西殿御跡に御坊を造らせ候へ 僧衆百人扶持申付し御祈禱候へと (「日什御奏聞記録」宗全5-31)
- [3] 宗長を大工として奉行二人に仰せ付けて西の御門に愛染堂その別当に (当537)
- [1] 4.12大風、阿弥陀堂法印の祈雨失敗 (○「報恩抄」317・1229)
- 【身延へ】
- [1] 5.12鎌倉を出る (○「光日房御書」928・1155) (○「報恩抄」323・1239)
- [1] 5.12酒輪13竹の下14車返し15大宮16南部17このところ (身延か) (◎「富木殿御書」964・809)
- [1] 5.16甲斐の国波木井の身延山に隠居 (遷80)
- [2] 5.17甲州飯野御牧波木井郷の身延山に入る (日340)
- [2] 5.17飯野の御牧波木井郷身延山に籠る (法・定遺2164)

- [2] 本門寺の戒壇を富士山に築くべし (法・定遺2164)
- [6] 八代村 日野村 西出村 甘利中野湯などへ (頭151-152)
- [3] 6.12身延沢と云う処に居住し給う (当561)
- [1] 6.17身延山へ入る (◎「上野殿母御前御返事」1583・1896)
- [1] 6.17かりの庵室完成 (○「庵室修復書」1542・1410)
- [3] 10文永の役の詳細 (「一谷入道御書」1329・995朝)
- 建治元 (1275) 乙亥 改4. 25 54歳
- [1] 1下旬 南条兵衛七郎の墓に詣る (◎「春の祝御書」1510・859)
- [1] 「撰時抄」を著す
- [1] 12.26強仁に公場対決を促す (◎「強仁状御返事」185・1123)
- 建治二 (1276) 丙子 55歳
- [1] 道善房死去 (○「報恩抄」323・1239)
- [6] 3.16道善房死去 (高290)
- [1] 7.21「報恩抄」を著す
- 建治三 (1277) 丁丑 56歳
- [1] 6. 9桑か谷問答 三位公と四条金吾 竜象房を論破 (◇「頼基陳状」1153・1346日興写本)
- [1] 身延の草庵を修復 (○「庵室修復書」1542・1411)
- 弘安元 (1278) 戊寅 改2. 29 57歳
- 弘安二 (1279) 己卯 58歳
- [2] 熱原の法華宗二人に頸を切れ畢 その時大聖人御感有て日興上人と御本尊に遊ばす (三8)
- [5] 大聖人は兩人 (日弁と日秀) の衆褒美として大曼荼羅を下され称讃の言を加へたまふ (精135)
- [5] 南部実長の嫡子弥四郎国重と申す 是即戒壇の願主なり (精127)
- [6] 日本第一の板御本尊 (1617年に要法寺18世日陽が大石寺で頂拝・富要5-59)
- [6] 国重 弁忍二公の父 戒号は妙諦 妻は妙常と号す (年466)

- [6] 10.12弥四郎等の請に応じて本尊を板に書す (年480)
- 弘安三 (1280) 庚辰 59歳
- 弘安四 (1281) 辛巳 60歳
- [1] 5 弘安の役 (○「光日上人御返事」933・1878) (◇「富木入道殿御返事」993・1886代筆現存)
- [6] 維 (ママ惟) 康親王に敵国調伏の旗曼荼羅を図して献上し親王勝利す (高294) (証7-14) (導3-243,251~254)
- [1] 11.24十間四面の大堂完成 (○「地引御書」1375・1895)
- 弘安五 (1282) 壬午 61歳
- 【池上へ】
- [2] 夏の始めに池上に (三13)
- [2] 9. 8身延を出る (日340)
- [2] 郷里を見せばやと思ひて (波・定遺1931 但し「満外」にこの箇所なし)
- [1] 常陸の湯へと思ひ身延を出る (○「波木井殿御報」1376・1924)
- [6] 高祖病 池上宗仲・比企能本 僻地に名医なく鎌倉に少なからずと進言 (高299)
- [4] 下総国に 塩部の湯へ御入有りなんとて池上まで御出有り (健：下932)
- [3] 9. 8午の魁身延の沢を立つ 下山兵衛四郎宅に泊 9. 9齊藤入道宅泊 9.10弥四郎宅泊 9.11鳥駒 (くろこま) 9.12河口 9.13クミチ 9.14竹下 9.15関本 9.16平塚 9.17瀬屋 9.18午刻荏原郡千束郷池上 (当562)
- [3] 或記 9. 8午刻身延出発 其の日下山兵衛四郎 9.9大井庄司入道 9.10曾禰次郎 9.11黒駒 9.12河口 9.13クレジ 9.14竹下 9.15関下 9.16平塚 9.17瀬野 9.18午刻 荏原郡千束郷池上村 (元56)
- [4] 9.13呉地 9.17瀬谷 (註48)

- [5] 9. 8下山兵庫 9.9大井庄司 9.10曾根の某 9.11黒駒の某 9.12河口の上房 9.13 呉地の遠山氏 9.14竹下の鈴木氏 9.15関本の下田氏 9.16平塚の長谷川氏 9.17瀬谷の一精舎 (頭184~185)
- [1] 9.18池上に入る 地頭衛門大夫宗仲 (遷80)
- [2] 武蔵国千束郷池上へ (波・定遺1932)
- [2] 池上右衛門大夫宗長が家にして死すべく候か (波・定遺1932)
- [3] 武蔵国荏原郡千束村池上 (長342)
- [1] 9.19墓をばみのぶのさわにせさせ候べく候、との書を甲州に送る (○「波木井殿御報」1376・1924)
- [3] 9.25立正安国論の御談義 (当562)
- [6] 三日間 下野塩原温泉に 中風に善い 帰路宇都宮 (高300)
- [6] 9.27池上に帰る (高300)
- [2] 墓をば身延山に立てさせ給へ 未来際までも心は身延山に住むべく候 (波・定遺1932)
- [5] 10. 3日朗讀状 (霊241)
- [6] 10. 3讓状 隨身仏・安国論・赦免状二通併せて日朗に付く (高301)
- [1] 10. 8本弟子六人を定める (遷80)
- [1] 御遺言云 仏は釈迦立像 墓所の傍らに立て置くべし云云 経は私集最要文注法華経と名づく 同じく墓所の寺に籠め置き六人香花当番の時見らるべし (遷84)
- [2] 御遺物配分事 註法華経 辨阿闍梨へ 御本尊一体釈迦立像 大国阿闍梨へ (日位の「大聖人御葬送日記」宗全1-55)
- [2] 聖人御滅の時に註法華経は弁の法印、一体仏は大国阿闍梨に取られ畢んぬ (日順「日順雜集」富要2-92)
- [2] 御円寂の時の件の曼荼羅 (日代から日郷への「宰相阿闍梨御返事」宗全2-235)

〔3〕 10.12北向に御座 釈迦像を立て方へよせ 白蓮阿闍梨御本尊を御前に懸ける(当562 元60 には或記として同趣旨の文あり)

〔4〕 日朗が大曼荼羅を掛けた(薩193)

〔3〕 御遺物配分で日昭に御本尊一体立像釈迦を 日朗には小袖一御馬一疋(当563)

〔4〕 註法華經私集最要文と号す 日昭へ 立像釈迦 日朗へ 仏宝は立像釈迦 法宝は註法華經 僧宝は大聖人(註48)

〔1〕 10.13辰の時御滅即時に大地震動す(遷81)

〔3〕 十三日は虚空蔵の日の十三日也(当524)

注

1) 日蓮聖人御由来伝

「当家宗旨名目」に引用されているが、元本、写本、版本ともなく詳細不明。

2) 国字伝

日蓮聖人御伝記ともいう。1682年の五年前1677年の成立。絵入りの読本。内容から日興門流の在家の作であることが窺われる。

(こばやし まさひろ・研究員)